

If you can dream it, you can do it!

キャリア支援委員会

多田弥生¹ 伊藤明子² 東 裕子³ 加藤則人⁴ 菊地克子⁵ 高山かおる⁶
 中島喜美子⁷ 松村由美⁸ 青山裕美⁹ 秀 道広¹⁰

はじめに

旧「皮膚科の女性医師を考える会」においては、日本皮膚科学会に所属する女性医師が増加する一方、女性医師の早期の退局、離職が問題となっていたため、仕事と生活の両立、モチベーションの向上、ロールモデルの提示等、主に女性医師を取り巻く問題に取り組んできた。各支部で行われてきたメンター&メンティーの相談会に代表される本会の様々な取り組みは、一定の効果をあげてきたものの、いずれも主に女性医師問題に重点をおいた活動であったため、男性医師も含めた視点での活動も必要と考えられてきた。

そのような背景のもと、2014年6月より旧「皮膚科の女性医師を考える会」は日本皮膚科学会「キャリア支援委員会」と改まった。これを機に、本委員会の目標は、男女を問わず、1) 皮膚科学における指導的役割を担う人材の育成、2) 皮膚科勤務医の就労の継続および再開の支援、3) 皮膚科医の使命感と公共心の涵養、と設定された。今後キャリア支援委員会で主催する企画は、この目標に合致した内容で開催していく予定である。その第一弾として、第114回日本皮膚科学会総会では、「If you can dream it, you can do it!」を開催した。本企画においては、診療、研究、指導、組織マネジメントに尽力されてきた演者の経験に接することで、皮膚科医が日々の診療、研究、教育、および組織

運営を円滑に行い、さらに院内での皮膚科の存在感を向上させるためのヒントを得ることを目的とした。『第一部：この人のキャリアが聞きたい!』『第二部：私の働き方とやりがい(病院部長編)～いかに魅力的な皮膚科診療を展開していくか考える～』の2部構成で行われ、5名の先生方に講演頂いた。以下に、演者の先生方から頂いた講演内容の記録を委員の所感を含めたまとめとともに掲載する。

第一部：この人のキャリアが聞きたい!

1) この人のキャリアが聞きたい!

皮膚科勤務医は、やるもやらぬも自由自在?～病院勤務医の勧め～

講演者 独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院
 白田俊和

若手皮膚科医の未来には、大学に残る、病院勤務医、開業医という3つの路があり、私自身は総合病院の皮膚科医として長い間過ごしてきた。近頃では病院皮膚科勤務医はなぜか絶滅危惧種に指定されかねない状況であるが、幅広い臨床に興味のある方には、病院勤務医が一番のお勧めである。病院の最大のポイントは、他科との垣根が低いので協力・連携が容易なことである。皮膚科は本人にやる気さえあれば、手術・救急医療から膠原病やアレルギー性疾患まで、幅広く深く取り扱うことが可能な科であるが、逆に何もやらない(手術はしない、重症は診ないetc.)で済まそうと思えば、どこまでも手を抜くことのできる科でもある。研修病院を選ぶ際には偶然や運を大切にするとともに、自分では気付いていない可能性を捜すためにも、様々なことにチャレンジしながら頑張ってみることが大切であろう。病院皮膚科として重要な役割の一つは、他科にとって役に立つ皮膚科ということであり、難しいことを滔々と述べた後で「ではステロイドを塗って様子を見て下さい」というような対応では、次からはコンサルトして来なくなってしまう可能性は高いと思う。

- 1) 帝京大学, ワーキンググループ委員, キャリア支援委員会委員
- 2) 新潟大学, ワーキンググループ委員, キャリア支援委員会委員
- 3) 鹿児島大学, ワーキンググループ委員, キャリア支援委員会委員
- 4) 京都府立医科大学, キャリア支援委員会委員
- 5) 東北大学, キャリア支援委員会委員
- 6) 済生会川口総合病院, キャリア支援委員会委員
- 7) 高知大学, キャリア支援委員会委員
- 8) 京都大学, キャリア支援委員会委員
- 9) 川崎医科大学附属川崎病院, キャリア支援委員会副委員長
- 10) 広島大学, キャリア支援委員会委員長

講演においては、病院皮膚科医としての経験をもとに下記について述べた。

1. 「名大方式」の研修病院選び～独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院へ（運も大切）
2. 熱傷との巡り合い～SCALDS scoreの作成、熱傷センター
3. よく学びよく遊べ（よく遊びよく学べ？）～週末は海へ山へ（リフレッシュ）
4. 午前中は皮膚科、午後から形成外科～形成外科専門医取得、皮膚外科黎明期
5. 環状紅斑と膠原病～Sjögren 症候群との出会い
6. 皮膚科医の常勤2名、定床3床からの出発
7. 病院皮膚科の収益と採算～保険診療とのかかわり～
8. がんばろう！皮膚科

2) この人のキャリアが聞きたい！

「置かれた場所で咲く」

講演者 旭川医科大学 山本明美

皆さんは何かを夢見て、その実現に向けて人生を積極的に歩んでおられますか？あるいは、そうありたいと思っていますか？実は私にはそういう積極性はなく、なかば受け身の人生でした。そんな私が皆さんに何を講演しようと悩んでいた時に手にしたのがノートルダム清心学園理事長の渡辺和子さんが書かれた「置かれた場所で咲きなさい」という本です。置かれたところで咲くように努めること、でも咲けないときは、その代わり下へ下へと根を張ると次に咲く花がより大きく、美しくなると説かれています。私は夫の国内、海外留学に伴って2度職場を変えましたが今振り返って後悔はありません。それぞれの場所で尊敬できる先生を恩師とすることができ、生涯の友人ができました。

置かれた場所、には置かれた立場、というの含まれます。私は2007年、当時の旭川医大病院の病院長に依頼されて、女性医療人の支援事業を始めました。皮膚科医としての仕事だけでも充分手に余る状態でしたが、任された仕事に真剣に取り組むことで、学内での部門や職種の垣根を越えた人脈ができ、その後の皮膚科医としての仕事にも大きなプラスになりました。また、2005年からは旭川市の総合開発計画や男女共同参画の審議会委員も依頼されて勤めています。こちらも大学病院の仕事以外にさらに仕事が増えて大変、という気持ちがよぎりましたが、引き受けてみるとやはり人脈が広がり、大学での仕事にもプラスになりました。

旭川市から推薦状をいただいて、2013年には北海道知事から旭川医大の男女共同参画事業に対する表彰状をいただくことができました。

どこで働く、何を仕事にする、ということよりも、どれだけ自分に寄せられる期待に応えられるかが生きがい、仕事がいを高めていくことに繋がるように思います。

3) 第一部まとめ

『第一部：この人のキャリアが聞きたい！』においては、病院勤務医、大学勤務医、それぞれの立場から、いかにリーダーとして長くモチベーションを維持し、時にふりかかる逆境を診療、研究、指導、組織マネジメントの向上につなげていくかというヒントを頂いた。巡り来たチャンスを積極的に拾い上げるか、受け身的に置かれた環境や、逆境とも見える境遇の中に活路を見いだすかの違いはあっても、チャンス（偶然）を運に反映させるのは自分次第、自分が動かなければ、運もついてこない、というメッセージは共通していた。さらに、夢中になってやっていると助けの手も差し伸べられる、という経験も両演者に共通で、取り組む人が公共心を持って取り組んでいれば、やがては周囲の共感を得て協力者も増え、ミッション自体も成功しやすいと思われた。また、そうしたミッションを率先して手がける人材こそ、リーダーにふさわしいと思われた。

第二部：私の働き方とやりがい（病院部長編） ～いかに魅力的な皮膚科診療を展開していくか考える～

1) 私の働き方とやりがい

患者・地域・スタッフにやさしい究極の地域基幹病院を目指して

講演者 東京都立墨東病院 沢田泰之

私の原動力は「人に喜んでもらえること」、「社会のためになること」、「自らの進歩を感じられること」、「理不尽なものに対する反発」ではないかと考えた。私の赴任時、5年間5名の医員が入院または休職するほど過酷な現場であったが、最初に院長に言われたことは「診療室を1つ内科倉庫にしたい」、「常勤医師を削減して、常勤医を1名にしたい」というものであった。前年までの皮膚科医たちの献身に対し、理不尽さに反発を覚えた。

墨東病院皮膚科の使命（ミッション）を決めた。

1. 地域に不足している医療を提供できる体制を作る（患者さん、地域医師に喜んでもらえる体制）。
2. よい医療を提供し続けるスタッフを守るために、よい労働環境を整備する（スタッフにも喜んでもらえる体制）。
3. 地域単位でよい医療を提供する医療環境の整備を行う。（社会の役に立つ）

すべての皮膚科専門医のいる医療機関を訪問した。救急、重症、難治・難病、皮膚外科の医療資源が不足していること、素晴らしい先生が地域にいたことが分かった。皮膚科医として未熟さを補うために北里大学名誉教授西山茂先生を始めとした多くの先生方に助けて頂いている。よりよい手術・治療のために、他科の医師に協力を依頼している。患者・地域・スタッフにやさしい究極の地域基幹病院を目指して、現在も進歩し続けていることを実感している。理不尽なことは時にあるが、仲間がいれば乗り切れる。仲間がいるから、勤務医はたのしい。

2) 私の働き方とやりがい

得意なことから始めよう！「こうだったらいいな」は始めよう！

講演者 社会福祉法人聖母会聖母病院 小林里実
総合病院で働く魅力は何か。まず、全身疾患患者も診られるのが大きい。顔が見える医師関係のため、些細な疑問も気軽に相談でき、依頼しあうことで距離が縮まる。次に、会議が少ない。規模から、数ある委員会も全科で参加する必要がなく、提案や質問があれば直接言えばよい。そして何より、自分のスタイルが実現できる。専門外来を組む、手術やレーザー、美容の時間を作る、外来と病棟のバランスだって自分で決める。うまくいかなければ見直せばよい。是非、自分が伸ばしたい得意分野から着手することをお勧めする。赴任直後、乾癬、掌蹠膿疱症について、整形外科、耳鼻咽喉科、放射線科に連携を依頼した。“やりたいこと”“楽しい”が優先である。サブスペシャリティは直接やりがいに繋がるが、“これは割と自信あり”程度でも充分だと思う。運営においては、病棟長、外来長、リスクマネジメントなど大学でのスキルが基盤にあると楽である。当科の常勤も自分と大学からの非専門医ローテーターの計2人であったので、人員不足をベテラン非常勤医の増員で補い、新しい専門外来を設置、前任の専門分野である乳児レーザーも、引き継いで学んだ。その結果、当科の収入は院内で3番目となり、

その7割を生物学的製剤と乳児加算付レーザー治療が占め、医師あたりの労働生産性が抜群に高いらしく、常勤増員が認められた。手術担当非常勤医を除き全員が育児中女性医師なので、育休も念頭に、敢えて週3.5日の最時短勤務者を採用し、ベテラン非常勤医の枠を残すこととした。人が足りなければ、科や病院の垣根を越えて考えれば良い。無理な時は、診断に問題ない粉瘤や脂肪腫を外科や整形外科に依頼したり、合併症のある患者の入院主治医を内科に引き受けてもらったり、末期医療が確実な腫瘍の治療はその疾患を専門とする病院に予め頼んでおく。自分だからできる皮膚科を組み立てる。元気、やる気、楽しそうは院内に伝染する。

3) 私の働き方とやりがい

病院内での皮膚科の立ち位置の確立と人材育成

講演者 独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院
小寺雅也

中京病院は名古屋市南部にあり、病床数：663床、職員1,300名 医師120名28診療科を備える地域の中隔病院である。昭和22年、病院開設とともに診療開始し、本邦初の熱傷センターを開設、その後、皮膚科、形成外科が分離し、現在は部長、医長1名（18年目）、医員3名（8年目、7年目、6年目）、後期研修医1名、非常勤2名の皮膚科スタッフで、膠原病、皮膚腫瘍や緊急疾患に定床22床で入院対応し、外来は平均110名/日、膠原病約600名の診療にあたっている。しかし、病院内では皮膚科はどうしてもマイナーな存在になりがちであり、皮膚科スタッフ数に見合う業績と収入を病院管理者に説明する必要がある。病院内でのプレゼンスを向上させる方略として病院にないもの、他科の医師がやりたくなさそうなものを積極的に取り組むこととした。まず病院になかったものとして、膠原病リウマチセンターを開設し、皮膚科、整形外科、内科の医師に加えて、看護師、薬剤師、リハビリ部門など多職種協働を図った。病診連携、講演会、研究会を行い、また看護師や薬剤師の学会活動をサポートすることで病院内でのプレゼンスが向上したと考えている。結果、皮膚科の私がセンター長を拝命し、病院内のチーム医療をより成熟させるリーダー役と考えている。次に皆がやりたくなさそうなものにも取り組んでいる。それは、初期臨床研修医の教育担当と総合診療医育成である。当院では2013年までの10年間で前期研修医数171名、後期研修継続者数109名（64.9%）が

研修している。これらの研修医教育担当および研修プログラム副責任者を勤めている。結果、前期研修医全員が皮膚科を必須ローテーションする。その中から毎年1~2名の皮膚科希望者がおり、当院で後期研修し、その後キャリアプランに応じて他施設での研鑽もバックアップしている。総合診療専門医後期研修プログラムの立案、作成にも参画し、日本プライマリケア連合学会の認定医・指導医を取得した。総合診療医に必要な領域別研修に皮膚科も列挙されており、また膠原病診療は、総合診療力を磨くうえで恰好の場であると考えているからである。また女性医師の出産、育児からの勤務医復帰部長養成プログラムも名古屋大学と協力し実行している。勤務医を希望するが、臨床への自信喪失感、急な休暇に対する不安、これらを解消しつつ、スキルアップし、病院皮膚科部長へのステップとなれるプログラムにしたいと考えている。

4) 第二部まとめ

『第二部：私の働き方とやりがい（病院部長編）～いかに魅力的な皮膚科診療を展開していくか考える～』においては現役の皮膚科部長にノウハウに焦点をしばって講演頂いた。成功のカギとなる共通点は、1) 地域医療連携への尽力（顔のみえる連携）とそのシステム化（得意分野に応じた地域内で役割分担を行う）、2)

皮膚科の病院内でのプレゼンス向上のための病院へ寄与する策の工夫、サブスペシャリティ、他科もまきこんだチーム医療の展開、3) 皮膚科を一つのチームとして常に意識し、公共心を忘れない、という3点にあると思われた。

さいごに

臨床病院、大学病院ともに売り上げの問題、人員確保の問題が常につきまとい、診療、研究、指導、組織マネジメントを高いモチベーションをもって継続することが難しい局面もあると思われる。本企画での講演では、演者はモチベーションを探すことに苦労しているのではなく、高いモチベーションをもっているからこそ、つらいことがあっても現在の仕事を続けられているということが感じられた。そして、それらのモチベーションに共通していたのは、まさに「患者のため」「皮膚科チームのため」という思いであった。If you can dream it, you can do it, が今回の企画名であったが、組織や他者を意識したdream実現のために邁進する演者の姿は、使命感、公共心に満ちあふれていた。心打たれ、明日への活力をもらえた聴衆も多いのではないと思う。お忙しい中、素晴らしいご講演をくださった先生方に心より御礼申し上げたい。